



Title	ミックスルーツ・ジャパンとGLOCOLとの連携
Author(s)	吉富, 志津代; 須本, エドワード
Citation	GLOCOLブックレット. 2016, 18, p. 93-103
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55576
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

3-4 対談2

ミックスルーツ・ジャパンと
GLOCOLとの連携

吉富志津代 × 須本エドワード

大阪大学グローバル
コラボレーションセンター
特任准教授

ミックスルーツ・ジャパン
代表

吉富 それでは二つ目の対談は、吉富とミックスルーツ・ジャパン代表の須本エドワードさんとの間で進めていきたいと思います。須本さんとは2008年に会いました。その後、NGOとしていろいろと連携をし、私がGLOCOLに着任してからも、さまざまな活動をつづけてきました。阪大ではセミナーやシンポジウムもおこない、報告書や映像データにまとめました³。

最初、須本さんに会ったときは、インパクトがありました。私たちのNGOも吹田市国際交流協会やよなな国際交流協会のように、外国にルーツをもつ子どもたちの教育に関する活動をしてきました。須本さんは、当時20代後半でしたが、彼のように当事者として「自分たちで状況を変えるんだ」という実感を持つ若者と出会い、「そうか、この子たちに期待して、何かできることをしよう」と思いました。

須本 みなさん、こんにちは。ご紹介にあずかりました須本です。私はミックスルーツの活動に2006年からかかわっており、来年で10年になります。吉富さんにはNGOの活動をつうじて知り合い、いろいろなきっかけでいろいろなお話をともにさせていただき、ご指導いただいています。吉富さんがおっしゃったように、当時私は20代前半でしたが、今はすっかり頑固でシニカルになったところもあるのですが、そんななかで…

吉富 子どもも産まれましたよね。

須本 そうですね。最近産まれました。子どもの話ができましたが、みなさんにみていただきたいのは、子どものイラストです。このイラストは、ある写真をもとに日系カナダ人の方に描いてもらいました。そこで描かれている4組の姉妹、兄弟たちは、6カ国プラス日本のルーツをもっています。

3 「共生？不安？2009」「ミックスルーツ・アカデミックフォーラム2010-2012(日本語・英語)」



Mixed Roots Japan

イラスト:カナダ人映像作家・アニメーターのジェフ・チバ:スターンズによるイラスト

このイラストは白黒なので、何の色もついていませんが、これに仮に色がついていたり、いろいろな情報が他にあったりすれば、みなさんはそれを見ただけで、いろいろと思うことがあるでしょう。今日は、そういう子どもたちの話もさせていただきたいと思います。

願わくは子どもたちが成長する過程の中で、自らで自分の色付けをしていってほしい。そしてその色を表現してほしい。親だって何かつけたい色がある。社会もいろいろな色をつけてみるかもしれません。そういう子どもたちや日本人全般が、自分たちの色を見つけられるような仕組みを仕掛けられないかについて考えたいと思います。

このような活動を一人の人間がやるのは、ただの個人の取り組みに過ぎません。ムーブメントにするためには、いろいろな人を巻き込まなければなりません。私たちは法人でもNPOでもありません。私が独断でやってきたことです。そのなかで一番がんばっているのは、ミックスルーツのお子さんたちの親御さんたちです。その親御さんたちは、世代を問わず、それぞれの地域で活動されています。そういう人たちを連携させて、なにかを起こさせるために、私はどちらかというと、ファシリテーター、カタリストのようなかたちで、「ミックスルーツ・ジャパン」というネットワークを人と人のつながりやSNSを通じてひろげています。

1. 足もとの国際化

須本 ミックスルーツのネットワークの活動は、2006年にはじめました。当時は現在のFacebookくらいの勢いでmixiというのが非常に流行っていました。それが画期的だったのです。

Facebookにはグループ・ページのファンクションがありますが、mixiには昔からコミュニティというファンクションがありました。コミュニティというものが、地域的な場所に縛られたものではなく、コンセプトをつうじてつくられるという感覚がうまく入ってきました。そのようなコミュニティに対する感覚は、私たちがみたいな多様なルーツや背景をもつ人たちにとってもまったく同じなのです。同じような人たちに会いたい、他の人たちはどんな経験があるのだろうか。それ以前は、ホームページなどを開設して、掲示板などをつうじて活動していた人たちがmixiで集まって、多様なルーツをもつ人たちが何千人もいることがわかってきました。

日本のなかには、想像以上に多様な日本人たちがいます。日本がどれだけ多様化しているのかについての映像です。在来の日本人がどれだけ海外に行っているのか、どれだけの人が日本から移住しているかがわかります。在日外国人も増えていて、2010年時点で日本に移住してきている外国人の数がわかります。国籍の内訳には、みなさんが活動のなかで支援されている子どもたちのルーツの国も多いと思います。

国際結婚も増えています。2010年の時点で3万カップルです。国際結婚の率がこれだけ増えています。ここには国際結婚、国籍の異なる人たちの結婚にかんするデータしかないのですが、それらの結婚から生まれた子どもは49組に1組で、非常に多様な子たちが増えています。厚生省のデータには、帰化した外国人、もしくはわれわれみたいに第二世代の間に生まれた子どもたちは入っていません。ですから実際の状況はもっと複雑です。

国際化というと、海外に目がいきがちですが、足もとも見なければなりません。まわりにはみえない多様性が非常に多くあります。外国にルーツを持つ子どもたちに対する政策や大学の国際化とはまったく違う次元の課題が多くあると思います。それらはいまの段階ではみえないので、同じ政策のなかであつかわれることが多いのだと思います。

私自身は、ベネズエラと日本のハーフなのですが、母子家庭で日本人の母に育てられました。私の妻は神戸生れの神戸育ちで、ずっと公立の学校に行き、日本の大学に進学しました。彼女の父はアルジェリア人で、母は日本人です。私と妻に子どもができ、ややこしいですが、ベネズエラの

クォーター、アルジェリアのクォーター、日本のハーフということになります。そんなややこしい人たちが、10年間活動しているなかで周りに増えてきています。外国にルーツをもつというひとつのくりだけでも、さまざまなアイデンティティがあります。

それがどうしてややこしいのかというと、個々の人のアイデンティティはそもそも落ち着かず、死ぬまで発展途上の状態にあるからです。ましてや親の国籍が違ったり、ルーツにいろいろあつたりすると、人はアイデンティティについて一生考えさせられます。私のように母子家庭に育ち、片方の親のことはよく知らない、片方の親の文化にあまり触れる機会がない、ほとんど日本にいたという人は、アイデンティティについてそもそもどう語っていいのかと不信に思うこともあります。今までミックスルーツの活動のなかでであつてきた人のなかには、10代後半で、パスポートが自分のもう一つの国との唯一のリンクだと強く信じて、絶対に帰化したくない、他国籍を手放したくないという人もいます。その人たちにとっては、国籍は存在の意義、権利の問題になります。日本人を名乗る、多ルーツを名乗ることは、常にアイデンティティを追求し、自問自答することなのです。他人にはみせない、微妙な側面が多様に存在すると思います。

2. 「ミックスルーツ」について

われわれがミックスルーツという言葉をつくった理由は、さきほどもいったようなmixiがはじまって、当事者間の分裂がおこったからです。同じ経験をした人を探そうと思っても、そう簡単にはみつかりません。公立の学校に行った人、インターナショナルスクールに行った人、片親しかいない人、施設で育った人。自分は英語を話せるけど、英語を話す人が大嫌い、英語を絶対にしゃべりたくない、いまだに敵国の言葉だと思っている人もいます。日本人の人はいくらミックスルーツでもコミュニティ・オンラインには入れてほしくないという人もいます。そうしたら、クォーターの人はどうするのか、逆クォーターの人はどうするのか、日本のルーツが四分の一しかない人はどうするのか。

新しい世代の中では、いまでも分裂がつづいています。たとえば、ハーフ以外は入れたくないという人もいます。それはわからないでもないです。それは、たとえば野鳥愛好会の集まりにレスリング・ファンをよぶようなものですから。「うちの話だけをうちらでしたい」というのはわかりますし、そういうことは実際によくあります。

「混血、ハーフ、クォーターの会」など、すべての名前を乱列するグルー

プもできました。ミックスルーツ・ジャパンでは「ハーフ」という言葉はほとんど使っていません。私たちは「ダブル」という言葉も好きではありませんが、好きな人は使っても結構です。ミックスルーツは、全体を掌握する言葉なので、在日外国人、先住民のルーツをもつ人、背景になんらかの文化的や人種的アイデンティティの多様性がある人たちを歓迎しています。

それには、私自身の生い立ちが大きく影響しています。私は神戸の西宮に育ちました。もし外国人集住都市で育っていたら、違う見方をしていたかもしれません。私にはある意味で心に余裕があり、一步引いた状態で全体の情勢をみられる立場にいたと思います。そうすると、つながっていないところもみえてきます。たとえば、東灘の深江にも国際交流センターはありますが、そこの外国人の方々と神戸の中央区にいる外国人の方々はまったく接点がありません。さらに、私が通っていた学校にはインド人たちがいました。彼らは、百年ごろ前から神戸の北野のあたりに住んでいて、普通に神戸の市民病院や中央病院で生まれ、神戸市民としてずっと暮らしています。そういう人たちをみていると、ハーフであることだけで、ミックスルーツを限定するのは浅はかな考えで、多様なルーツもつ人たちはすでにわれわれの周りにもいるし、その人たちとつながり、対話をしていかないといけないという気持ちになります。

そのような多様な人たちとの接点は、生き様や境遇ではなく、「日本」なのです。日本とは切っても切れない縁なのです。日本は、ある人にとっては血筋の話かもしれない、ある人にとっては嫌いな国かもしれない、好きな国かもしれない、行ったことがないけれど憧れの国かもしれない、いろいろなかたちで日本と接点を持つ人たちがいます。ミックスルーツの活動をしていると、Facebookをつうじて、だんだんと五〇代、六〇代のハーフの世代ともつながりはじめました。彼らは日本語をほとんど話しません。戦後に海外に行った人たち、戦争花嫁の子どもたちなど、いろいろな人たちがいます。

当事者たちが自分たちで自問自答すると同時に、最近とくに私たちより若い世代にたいして、多文化は脅威なのかという問題が各国でつきつけられています。たとえば、ドイツでは、ワールドカップに出場したサッカー選手がマルチカルチャーだから、彼らは新しい世代であるということが話題になりました。実際、移民あるいは移民二世の人たちも増えています。親が現在住んでいる場所とは違うルーツをもっているというだけで、移民問題や社会の調和の問題になってしまうのです。

私は、5年前に大阪で講演依頼があり、日本のなかの多様性について

話をしましたが、そのとき宗教の多様性についてはどう思われますかと質問されました。そのように多様性を問題視する考え方もあるのだなと思いつつ、神戸で育った私にとっては非常に感慨深いものがありました。100年ぐらい前から、1キロ圏内にいろいろな宗教や宗派があるのです。シナゴークから数百メートルのところにモスクがあり、ジャイナ教もあるし、オーソドックスのキリスト教会もあります。昔は国として宗教を徹底に管理していましたが、いまは時代が違います。といいながらも、宗教の選択が自由になった時代に、多様な人たちをどうみていくのかという問題があると思います。

海外でも多様性に関する活動はいろいろあります。アメリカは多様だというのが一般の認識ですが、そうではなくてただ単にいろいろな人がいるだけで、多様な人たちのアイデンティティはしばしば否定されていました。たとえば、1967年までアメリカ合衆国全体の半分の州で他人種間の結婚は違法でした。これが合法になったLoving vs. Virginiaという記念している日なんです。ある日本のハーフの子がつくったイベントで、いまでは6年ほどやっている大きなイベントで、世界中でこれをLoving Dayとして6月にイベントをやるということで世界中でムーブメントとしておこなわれています。日本の企業も、アメリカではこれに出資したりしているのです。

それから、ロサンゼルスの大きなアート・フィルム・フェスティバルやバンクーバーでHAPA PALOOZAなどいろいろなものがあります。全米日系人博物館がロサンゼルスにありますが、そこでもハーフについて“Visible & Invisible”という象徴的なタイトルで展示会をおこないました。そこにわれわれも貢献させていただいて、こういうふうになりました。Loving Day、HAPA PALOOZA、HAPA JAPANこちらはいろいろな書籍、子育てガイドとかもあるのです。

3. GLOCOLとの連携

須本 話が長くなりましたが、吉富さんにはとても感謝しています。吉富さんが、国立民族学博物館の出版物に、私について記事を書いてくださいましたが、それをきっかけにいろいろなことに参加することになりました。しかし「外国人として生きる」というコラムのタイトルには、昔から違和感を持っていました。私は、幸か不幸か、見た目は日本人です。しかし、これはみなさんがたずさわっている外国にルーツをもつ子どもたちの場合も同じだと思うのですが、日本人でありたいと思うと同時に、自分には違うものがまぎれもなくあって、それから逃げられないし、逃げたくもないし、

それを隠すつもりもない。そういった感覚は強くあります。それは矛盾しているといわれますが、それが私たちの立場です。

2010年から大阪大学GLOCOLとは、いろいろなことを一緒にやらせていただきました。セミナー、シンポジウム、公開のパネルディスカッション、公開のラジオ収録、道頓堀でイベントもやりました。

「ブラッカニーズ・アンド・プラウド」という題名で、家族向けのワークショップもやりました。ブラックとジャパニーズを組み合わせて「ブラッカニーズ」という言葉があります。関西では特に、アフリカン・アメリカンではなく、西アフリカと日本のミックスの子どもたちが多く、彼らのお兄さんやお姉さんにあたる方々をよんで、一緒に子どもたちにもわかりやすいワークショップをやりました。『アメラジアンの子供たち—知られざるマイノリティ問題』という日本では有名な本をかかれたスタンフォード大学のスティーブン・マーフィー重松先生とのワークショップもやってきました。

日本でミックスルーツのテーマを当事者が興味を持ってやるのが最近増えてきています。特に学部生からたくさんアプローチがあります。よく同じテーマの問い合わせがくるので、このままでは発展性がないと思い、ミックスルーツの学会を立ち上げようと思いました。アメリカではミックスルーツの学会が3つくらいあるので、いずれはそれくらいのレベルに達したいと思い、アーカイブをつくったり、当事者の学生たちが発表したり、先輩方に発表してもらったりしています。南カリフォルニア校やいろいろなところから来ていただいて、アメリカの学会の方々にも刺激を与えています。

設立当時から私たちはいろいろな団体とコラボしています。先日は、とよなか国際交流センターでワークショップをさせていただきました。GLOCOLにも来ていただいたスタンフォード大学のスティーブン・マーフィー重松先生と2015年に東京でワークショップをやりまして、当時は宮本エリアナさんがミス・ジャパンとして選ばれたことで物議もあったので、CCTV中国のテレビ、TBS、NHKワールドなどが取材に来たりして、GLOCOLでつくられたネットワークが数年後もいきています。

多様な人たちがわれわれの周りにすでにいて、将来的にはそういう人たちが地域に根ざしながら、自分たちのアイデンティティを自分たちの力で表現できるような社会をめざし、今後も活動させていただきたいとします。

吉富 ここまで須本さんに語っていただきました。対談ということなのですが、あえて打ち合わせはせず、まずは活動を紹介してくださいとお願いしました。彼の中にはいろいろと伝えたいこと、いろいろな経験、思

いがいっぱいつまっているのです。彼と知りあった当時は、彼のようにいろいろなものを発信したい人がそれを発信する機会があまりありませんでした。それをNGOの活動をつうじて一緒に発信し、その後それとはまた違ったアカデミックな場で一緒に活動することを彼も望んで、学術的なことも加えた発信がしなかったのです。私は彼が発信する場と機会を提供できればいいと思いました。それがこのプロジェクトにおける私の役割だと思ってやってきました。私からききたいことは、大学と一緒にやったことという意義があったのか、やりにくいことはあったのか、そして今後の展開について、その3点です。

須本 なぜ大学と一緒にやりたかったかという、ただ単に助成金が欲しかったからではありません。私自身は研究者ではありません。本業はまったく違って、地域開発や里山のバイオエネルギーに関する仕事をしています。仕事と同時進行で、コミュニティに根ざした自発的な活動をするなかで、われわれの声が伝えられる場、われわれみたいな人たちがもう少し何か社会に伝えられる場がないかと思ったのです。

ミックスルーツに関しては、あまりにも個々人が多様なので、パーソナルな話をしはじめたらきりがありません。メディアにとりあげられるのは、インパクトのあるいじめの話などしかありません。それらも大事なのですが、もっと客観的なデータも必要だと思います。ミックスルーツの人たちがただ単に調査の対象だけになっていたら、彼らの本当の声はとりあげられるだろうか。彼らが自分たちでやる研究や対話になにか意義を感じてもらえないだろうか。何かのきっかけで互いに学んだり、考えるたりすることが偏屈なことでも格好悪いことでもないと思えるような機会がないのか。そういうことを考えて、あえていろいろな人たちをごっちゃにしてやるということになったのです。

大学との連携でやりにくかったことといえば、どちらかというと私たちのほうに問題があったと思います。ミックスルーツに関することをやりたいと思う人たちが、当事者のなかではまだまだ少ない。10年も活動していると、小学生のときにミックスルーツの活動にかかわっていた子どもたちが、高校生になり、当事者意識をもつようになって、そういう意味では変化はあります。しかし、どうやったらもう少し若い人たちを引き入れられるのが課題です。実際にこういう自らの発信活動を日本でやっているのは、ミックスルーツの人たちのなかではまだまだ数少ないのです。

インターネットをつうじて新しくできているグループには、何千人というメンバーがいて、東京でメンバーが花見をすると400人ぐらい集まったりします。そのなかでも細分化があり、活動の話には興味はないという人たち

も多いのです。そういう人たちには無理にかかわるようにはいいません。どうかして、彼らも自分たちの社会に責任をもって関わり、何か表現したり参加したりすることが楽しいと思ってもらえるきっかけをもう少しつくりたいと思います。

吉富 なるほど。私の方から少し補足しますと、私が彼と一緒に活動をするにあたって、彼には自由に動いてほしかったし、彼が持っているいろいろなネットワークを活用してほしかった。大学側では予算と場所を提供し、ロジスティクスのほうは私がやりましょう、と思っていました。

それから、彼とのつながりにはない人材を活用することができました。たとえば、グランフロント大阪で開催したミックスルーツについてのパネルディスカッションに県会議員の人をよんでくるとか、大学でミックスルーツの研究している先生を当事者たちが並ぶなかに入ってもらったとか、日本のなかでは絶対的なマジョリティに属する人たちの視点を入れたりとか。大学が開催するからこそできることがあると思います。私自身も一緒に活動をすることで、いろいろなところにつながりができました。Win-Winな関係でいろいろなことがひろがったと思います。

今後についてですが、こんなことをひろげたいとか、大学関係だけでなくもいいので教えてください。

須本 今後は大学間、そして国際的なネットワークもつくりたいと思っています。ぜひもう少し学術的に分析できる人材が増えるようにしたい。そのためにも学会だとか、2017年に予定している展示会や映画の上映会などを通していろいろな連携ができればいいと思います。今年1年は、『ハーフ』というドキュメンタリーの上映会に参加させていただいたので、そこで日本全国いろいろな大学、市役所、国際交流協会でのトークショーを主にやってきました。そこからできたネットワークをつかって、次のステップとしては、ネットワークを具体化して、私ができなくなっても次の人たちにつなげたいと思います。

吉富 その『ハーフ』という映画は、多言語に訳されて世界中で上映されています。私も『ハーフ』の上映会とともにコメンテーターとして、2014年にフランスのパリ大学によばれました。『ハーフ』の映画の中にはGLOCOLのワークショップやフォーラムの映像がたくさんできます。そういう意味で、阪大でこういうことをしてきたというアピールもできたと思います。

須本 映画のなかにGLOCOLテロップ、ワークショップが何回もできずから。

吉富 それから、ミックスルーツ学会を立ち上げるそうですから、そういう学会や研究会などへのひろがりにも役に立ったと思いました。

須本 ミックスルーツのホームページ「www.mixroots.jp」というところをみていただければ、研究会など私たちの活動についてご理解いただけると思います。

ディスカッション

吉富 大幅に時間をオーバーしてしまいました。みなさんとの協議の時間が少し減ってしまいましたが、よろしければ少しだけ質疑応答の時間をいただけたらと思います。

加藤 名城大学の加藤と申します。本日は大変貴重なお話をありがとうございました。ミックスルーツの活動ということで、名古屋でも様々な文化的背景をもった人たちがいます。名城大学にも大阪大学と比べて少ないと思いますが、いろいろな背景をもった学生がいて、ミックスルーツの学生については、職員としても興味深いところではあります。GLOCOLの活動ではいろいろなネットワーク、コミュニティとのつながりを大事にされていて、活動されているところがすごく興味深くて、われわれももう少し頑張っていきたいと思ったり、新しいネットワークとつながっていくときに大事にされていることがありましたらお話いただければと思います。

吉富 ご質問をありがとうございます。新しいネットワークをつくるのは簡単ではありません。時間をかけて培ってきた延長線上にいろいろなものができるとかだと思います。たとえば、大学が一から築き上げるのは大変かもしれませんが、新しいネットワークをもっている人材とつながるとか、私が須本さんとつながったように、すでにいろいろなつながりをもっている人たちの活動を活かすような方法がいいかもしれません。その中からまた新たなつながりが生まれてくるような気がします。

田中 大阪市民局ダイバーシティ推進室の田中と申します。今日は貴重な機会をいただき、学ばせていただいてありがとうございます。お話を聞きながら「あの区役所のあの係長にちょっと紹介したらおもしろいことが起こるだろうな」と思いながらずっと聞かせてもらいました。

今日聞かせていただいている思ったことは、ふたつあります。ひとつは学生さんが地域のなかでいろいろな活動にかかわれば地域のためにもなって、学生さんもその経験をいかすことができると思います。もうひとつは、学術の場ならそれを言語化することで学生さんにとっては最後の大事なような意味があるのだらうと思いました。私はもともと区役所にいたので、地域住民、地域振興会、PTAの保護者の方々に、学生さんたちの活動が伝わるようにしていただけたらとてもうれしく思います。私たち

も地域と大学をつなぐ役割をになう必要があると思いながら、今日は学ばせていただきました。

吉富 どうもありがとうございます。本日私のNPOの事務局長も来ていますので、近くでみていてどう思うか、教えてください。

李 はじめまして。多言語センター FACILの李と申します。今日はお話をありがとうございました。紹介されていた活動のいくつかは、私どものNPOと一緒に活動をさせていただいたものです。大学という組織でしかできないことがあるのだと、吉富を通して大学と一緒に仕事をさせていただき、思いました。3.11の東日本大震災が起こったときに、震災についての情報を多言語で発信するということがありました。その際に、私どもの登録者のなかからボランティアをつどったのですが、それだけではなく大学の関係者のなかで多様な言語のできる方々もボランティアとして登録いただいて、一緒にさせていただくこともありました。NPOと大学では、それぞれ得意不得意の部分があると思いますが、補い合ってやっていけない方法があれば、一緒にやっていくのは難しいこともありますが、培われていけばいいなと思いました。

常田 どうもありがとうございました。お話はつきないと思いますが、この機会を通じてみなさまの間でもいろいろなネットワークづくりができれば、GLOCOLとしましてもうれしく思います。本日はお忙しい中お越しいただき本当にありがとうございました。今後とも大阪大学GLOCOLをどうぞよろしくお願いいたします。